

道徳科に生かす指導方法の工夫

教材の提示

道徳的価値を主体的に自覚していくための手がかりとして、それぞれの児童生徒とねらいを結び付ける役割を担うのが教材である。主に教師による範読が行われているが、ICT機器で場面絵を提示したり、劇のように動きを入れて提示するなど、視覚的に捉えやすくする方法も有効である。複数の方法で教材を提示し、内容を捉えやすい方法を児童生徒が自分で選択するという工夫もできる。思考をより一層深める教材の提示を工夫したい。

発問

児童生徒の思考や反応を予想し、考える必然性や切実感のある発問、自由な思考を促す発問を心がけたい。児童生徒の発言を受け、教師が即興的に、あるいは意図的に行う「問い返し」「切り返し」も大切である。「問い返し」により、抽象的だったり、理由や根拠が明確でなかったりする児童生徒の発言を具体化させることができる。また、「切り返し」では、児童生徒に意図する内容を角度を変えて見つめさせ、授業に深みをもたらすことができる。

話し合い

話し合いを通して、自他の感じ方、考え方を比較、検討することで、道徳的価値についての理解を深め、自分の感じ方、考え方のよさや課題に気付くことができる。そのためには、自由に発言でき、互いに安心して学び合える支持的風土の醸成が大切である。また、多様な考え方が生まれる内容や児童生徒から出てきた疑問や考えてみたいことをテーマに設定するなどして、児童生徒が夢中になり、主体的に取り組めるような話し合いを仕組みたい。

書く活動

一般的には、道徳ノートやワークシートが使われている。これらにより、児童生徒は自己の成長を実感し、これまでの学びの足跡を確認することができる。毎時間のまとめだけでなく、学期ごとに振り返ることで、自己の成長や課題について自己評価に活用したい。さらに、学校と家庭の「架け橋」となる効果も期待できる。書くことが苦手な児童生徒には、教師が聴き取って記入したり、表情シールや記号で自分の考えを表現させたりするなどの配慮を心がけることが求められる。

表現活動

表現活動を通して、登場人物の心情や行動などを疑似体験することで、道徳的な問題場面に深く関わることができる。ねらいの根底にある道徳的価値について共感的な理解を深め、主体的に道徳性を身に付けることにつながる。単に体験や活動を目的とするのではなく、役割演技や動作化等を通して、感じたことや考えたことを共有しながら、道徳的価値に気づき、実現することの難しさやそのよさを考えられるようにすることが大切である。

板書を生かす

板書は、児童生徒にとって思考を深める重要な手がかりとなる。心情や道徳的価値を自覚する場面に合わせて高さを変えて場面絵を掲示したり、場面絵を中心に置いて登場人物の心情や立場の違いを強調したりするなどの工夫が考えられる。児童生徒の意見を書くだけでなく、思考の流れや気づきを構造的に板書することを心がけたい。話し合いを深めるために、自分の考えや立場をネームプレート等を用いて表す方法も有効である。

説話

説話は、ねらいの根底にある道徳的価値を、児童生徒がより身近に考えられるようにするものである。「やってみよう」「実践してみよう」という意欲を高める効果がある。説話の内容は、身近な時事問題や児童生徒のエピソード等様々であり、教師自身が日頃からアンテナを高くし、その材料を集めるよう心がけることが求められる。学年や学校体制で道徳の指導計画を共有し、日常的に説話の材料集めを行うような教員同士の関わりを大切にしたい。

道徳科に生かす指導方法を工夫するためには、ねらいや児童生徒の実態、教材、学習指導過程に応じた、適切な指導方法となっているかを児童生徒の姿から評価することが大切です。「多面的・多角的な見方」「自分との関わりの中で深める」という学習評価の視点について、次の点を参考にしてください。



| 多面的・多角的な見方とは | 自分との関わりの中で深めるとは |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ▶ねらいとする道徳的価値の様々な面を捉えて考える ▶ねらいとする道徳的価値を支える様々な根拠を考える ▶様々な立場で考える ▶時間の経過とともに変化する気持ちを捉えて考える ▶人間の弱さや強さ(人間理解)を捉えて考える など | <ul style="list-style-type: none"> ▶教材の問題点等を自分のこととして受け止めて考える ▶日常や学校生活等を想起しながら考える ▶自分の生活を見つめ、振り返りながら考える ▶自分だったらどうするか考える など |

<特別な配慮を必要とする児童生徒への指導について>

発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒はもちろん、海外から帰国した児童生徒、日本語習得に困難のある児童生徒等に対する配慮として、それぞれの学習の過程で考えられる「困難さの状態」をしっかりと把握する必要があります。状態を把握した上で、ルビ付きの教材を使う、表情シールで考えを聞くなどの必要な配慮を考えましょう。

